

2018. 02. 20—03. 24 “ 能付資料の世界 — 技芸伝承の軌跡をたどる — ” 展示解説

\* 研究所サイトにて画像を公開している資料については、解説末尾に「→」を付し、示す。「能楽資料デジタルアーカイブ」の「3. 能楽伝書」は「能 3」、「4. 付」は「能 4」、「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」は「金」と略称する。

## I 型付以前

### 1 『二曲三体人形図』 能楽研究所蔵

世阿弥伝書。二曲（舞歌）を体現する童舞、物まねの風体の三体（老体・女体・軍体）、その舞姿（老舞・女舞）、三体から派生した風体（力動風・碎動風）、近江猿楽に源流のある風体（天女舞）、以上9種の演技の要点を絵図入りで説明した伝書。大和猿楽における碎動風鬼の「一働<sup>ひとはたらき</sup>」の足数と動き方を示した記述がある。 →能 3

### 2 『世子六十以後申楽談儀』（細川本） 法政大学鴻山文庫蔵

世阿弥伝書。世阿弥の発言を次男の元能が筆録・整理した伝書。展示本は、徳川家康所持本を細川幽斎が書写した本の転写本。〈歌占〉「地獄の曲舞」を例にした「序をば序と舞、責めをば責めと、責めつ<sup>く</sup>めつすること、定れる也」の条からは、謡に合わせた具体的な所作とそれを「すべき時節」が決まっていたことがわかる。 →能 3

### 3 『世子六十以後申楽談儀』（黒川本） 能楽研究所蔵

世阿弥伝書。世阿弥の発言を次男の元能が筆録・整理した伝書。展示本は、国学者の黒川春村旧蔵本。〈松風〉結末のかかり（風趣）について述べた条では、詞章に合わせた繊細なタイミングでおこなわれる所作が興味を生むことを述べる。 →能 3

## II 技芸の整備と付の誕生

### 4 江戸初期転写『妙佐本仕舞付』 法政大学鴻山文庫蔵

能型付。慶長三年（1598）奥書。細川十部伝書の一つ。細川幽斎の三男妙庵玄又が、能の師匠であった一両斎妙佐の型付を書写した本の転写本。妙佐は観世宗節に能を習い、観世長俊・元頼・古津宗印らと親しかった人物。妙佐の交友関係や、本書の所収曲（56曲）に観世系統の曲が多いこと、末尾の〈邯鄲・遊行柳〉が元龜二年（1571）年細川邸における観世宗節父子の演能記録であることから、本書は室町時代末期（天文・永禄頃）における観世系統の能の実態を伝える型付といえる。所収曲によって記事に精粗はあるが、シテ以外の役の演技・装束・囃子事等にも言及する。〈恋重荷〉など、現行ではおこなわれない演出が記されている例もある。 →能 4

### 5 『聞書色々』 能楽研究所蔵

室町時代の世阿弥伝書・謡伝書・鼓伝書など、さまざまな能伝書を合写した本。観世大夫元広・観世長俊らの聞書部分には、〈実盛・熊野・鉢木・砧・大蛇・昭君・頼政・難波梅・三井寺〉の室町末期永正頃の型付が含まれる。

## 6 『戦国期囃子伝書』 能楽研究所蔵

小鼓の付「小鼓之手聞書」、大鼓の付「風曲集聞書」、式三番詞章、笛伝書、「永禄元年卯月吉日／威徳相伝写之」の奥書を持つ大鼓の付など、数種の伝書の合写本。全体の奥書は「此書物足代七郎右衛門尉殿御相伝被成候物にて同／伊兵衛殿江懇望仕書色々あつめ三帖ヲ巻帖ニ書也／慶長拾二年 三月吉日／二見忠隆（花押）」。

奥書に出てくる人名から、伊勢の御師である素人が書き留めた伝書と推定されている（宮本圭造氏の口頭発表に拠る）。「乙がちに打て」というような全般的な説明ではなく個々の曲について具体的な打ち方を記す手付としては最も早い時期のものの一つである。

展示箇所は前半の小鼓付の一部。「小鼓之手聞書」の内題のもと三十八曲分を所収し、一つ書きで抜き出した謡文句の右（まれに左右両側）に朱で小鼓の粒を記す。記号は●フ▲がそれぞれ現在のポプチタを表しているらしい。同じ謡を複数回書き出して替ノ手を記していることもある。大鼓の付二種にも朱で粒が記されている。用いられている記号は、「か」「キ」（○で囲むこともあり）が多く、それぞれ頭とキザミを表しているように見えるが、「おつ」「かさねて」等の指示も散見し、ところどころには小鼓の手と思われる記号も混じる。各記号の意味や打ち方など、未だ解読できていない部分が多い。

## 7 慶安四年（1651）『舞芸六輪次第』 法政大学鴻山文庫蔵

能伝書。207曲を6種に分類、主に装束の注意点を記す。現存する最古の装束付といえるが、曲趣や演じ方についても言及する。番外曲や稀曲が多く所収され、用語等から室町末期永正頃の内容を伝える。シテだけでなく、ワキなど他の役にも触れる。

## 8 『炭蓮江問日記』 能楽研究所蔵

能伝書。本願寺坊官でありながら四座の役者をしのぐ演能活躍をした下間少進が、金春大夫炭蓮（八郎喜勝）に教わった事柄（面・装束、型、心得・故実など）を書き留めたもの。一丁表に天正十年（1582）八月の年記があり、本書は少進の『童舞抄』（展示番号11）・『少進能伝書』等、多くの伝書中でも最も早い時期に記された。目録には53曲があげられるが、実際の記事は22曲分。曲名と作り物の絵しか記されていない曲は、炭蓮から相伝を受けるはずであったが果たされなかったものであろう。 →能4

## 9 慶長十年（1605）弥生七日筆「とうほく」 般若窟文庫蔵

金春流の〈東北〉の能型付。謡の一部を引用してその箇所を記す形式。シテ女とワキ僧との問答後の〔上ヶ歌〕「年月をふるき軒端の梅の花…」からトメまでを記す。冒頭の部分は「一」～「四」まで通番号を付している。「見る」型・廻り始めるタイミング・向きを変えるタイミングを中心に記述。大掴みに所作を捉えて記述する、古態の型付の特徴が見られる。奥書に「慶長十年<sup>4</sup>弥生七日書〔虫損〕」とあるが、墨のにじみで「十年」の部分が読みづらい。丙午は慶長十一年であるので、ともすると十一年か。 →金

## 10 慶長十三年（1608）『井筒 仕舞付』 般若窟文庫蔵

〈通小町〉と〈井筒〉の型を続けて記す二枚の後半。筆者不明。初めの五行は〈通小町〉の終曲部「（戒めならば）たもたんと」以下、トメまで。五行目の下に「井つゝ」と題を記して一曲全体の型を記す。末に「慶十三年七月十二日闇中ニ書候」とあり。

謡の一部を引用してはその箇所を記す形式。「見る」型が多いこと、舞台上の位置ではなくて実際の方角を指定する場合があることなど、古態を残している。井筒を覗く型をはじめ、終曲部の型が詳しい。誤字脱字や謡の覚え違いも多い。「西」を「行」、「ゆき」を「けき」と誤った箇所などは、内容を理解できない者の誤写にも見える。 →金

## 11 『童舞抄』 法政大学鴻山文庫蔵

下間少進自筆伝書の能型付『童舞抄』3冊(70曲所収、慶長元年(1596)奥書)、『舞台之図』『叢伝抄』各1冊。どの冊も非常に豪華な装丁。

金春炭蓮に師事した少進は、天正十九年(1591)前後から関白豊臣秀次に能を指南し、秀吉の演能に助言することもあった。秀次や大名衆の前で多くの能を盛んに舞い、能を通して大名衆と交流をする活躍を見せた人物。関ヶ原合戦後に松平忠吉(徳川家康四男)・龍造寺信重・秋田実季・永井直勝といった武将や小幡弥兵衛・石井勝左衛門ら手猿楽の役者たちに能の稽古をつけた。彼らは起請文を少進に提出し、『童舞抄』『舞台之図』『叢伝抄』一揃を相伝された。

『叢伝抄』は、少進が様々な伝書から説を集め、まとめた能伝書。

『舞台之図』は作り物のある舞台図を示したもの。曲ごとに作り物の形や置き位置が明確に伝わる。

『童舞抄』は詞章の一部を引いて、そこに充てる所作を記す形式の能型付。ワキ・ツレの装束や演技は簡略で、シテを中心に記述する。〈芭蕉〉「曲舞のうち、色々に仕舞あり」などのように、具体的な所作を記述しない部分もある。→能4

## III 大名家で編まれた付

### 12 伊達家旧蔵囃子付 法政大学鴻山文庫蔵

仙台藩の役者たちが藩主に奉呈した囃子付。全十二帖。丁寧に浄書し、習物の分は金具付きの帙に入れた上で、金具付きの特製箆笥に収める。内容は、幸流大鼓の頭付と一噌流、平岩流の笛唱歌。現在は滅びてしまった平岩流の唱歌がまとまって書き留められている点でも貴重である。「太夫クツロギ仕候節は橋掛り中程迄御流シ被遊<sup>あそびまわ</sup>」等、藩主に対する最上級の敬語を用いて記されているのが特徴。

### 13 仙台藩伊達家伝来本『真徳鏡』 法政大学鴻山文庫蔵

金春流の伝書。全五冊。仙台藩お抱えであった金春大蔵家の謡伝書・囃子付・型付を集成した総合的な伝書。五代藩主・伊達吉村(1680-1752)の命によって編纂されたものと考えられる。右筆による美しい文字、粒付は●▲の判押し、粒付・舞台図・動線には朱や金泥を用いる大変豪華な装丁。『金春太鼓頭付』(展示番号21)も同様の経緯で編纂された付である。

### 14 安田文庫旧蔵宝生流伝書のうち「〈鷲〉仕舞付等合写本」 法政大学鴻山文庫蔵

宝生太夫家に伝わる伝書・型付・書上類を、十世宝生友于(1799-1863)の死後、前田家が所持していたところ、明治維新後に十一世宝生九郎(知栄)が返却を願ったので原本返却前に写しを取ったもの。前田家から安田文庫に移った経緯は不明。

展示は宝生流の〈鷲〉の型付と笛唱歌(一噌・森田)。宝暦~弘化まで異なる時代の付が合写されている。加賀藩主からの要望や問い合わせに応じて提出したものの写しも含まれている。

### 15 享保頃上杉本金剛流型付 法政大学鴻山文庫蔵

木箱入り全35冊(仮綴じ31冊、袋綴じ大小4冊)のうち。代々能楽を愛好し金剛流との縁も深かった米沢の上杉家で、正式な型付作成のために集められた草稿らしい。「享保十四年閏九月廿二日」「享保十七年二月三日金剛太夫仕舞付」等、日付が記されていることもあり、全体が享保年間のものと思われる。仮綴じ本には「御本・上野本・黒金本・志賀本・福島本・金剛聞合本」「ヨミ合済・稽古済」等、依

拠した本や作業の注記が書き込まれているものも多い。上野・黒金・志賀・福島の名は『上杉家御年譜』の享保頃の記事に名が見える米沢藩士の家。藩主の所持本のほか、能之稽古をしていた藩士の手控えや金剛太夫に問い合わせた情報などを集めての大きかりな試みであったことがうかがわれる。

#### IV 立方諸役の型付 一ツレ・子方・ワキ・間狂言一

##### 16 元禄十年（1697）竹田七郎元喜筆「富士山子方仕舞付」 般若窟文庫蔵

金春七郎元喜（のち八郎重榮）が、金春八左衛門（安成）宛の書状にしたためた〈富士山〉子方の装束付と型付。申し合せの前日に送られたもので、子方を勤める八左衛門安成の子・万三郎（のち勝成。当時十三歳）に伝えるために抜き出したもの。玄人役者間での日常的な演技確認の一幕が垣間見られる。江府加藤越中殿の屋敷での演能に向けた申し合せで、〈富士山〉のシテは書状の差出人である元喜の父・八郎元信が勤めたことが包紙から知られる。 →金

##### 17 紀喜和伝書（13）『連・子方仕舞附』 法政大学鴻山文庫

津軽藩お抱え能楽師・野添（紀）喜和が書写した付・伝書群、計十八点のうちの一冊。ツレと子方の装束付および型付。嘉永六年（1853）奥書で53曲を所収する。展示は〈国栖〉天女の下り端の型付。嘉永五年、井伊様にて喜多六平太能静の演能の際のもの。笛の唱歌の横に、「サシ出」「廻り込身入」など型を記す。

##### 18 『能之秘書』 能楽研究所蔵

宝玲文庫旧蔵。流儀不明の脇方の付で、全116曲を収める。ワキとワキツレの舞台上の位置、間狂言とのやりとりなども記している。前もってシテと相談しておくべきことに言及する例も見られる。奥書は無いが、着流し僧を「うつほ僧」と呼ぶなど、全体に古様を残しており、書体からも、慶長頃の写本と推定されている。展示箇所は〈葵上〉。祈りで小袖を奪おうとするシテを後ろから打つという、古さを感じさせる演出を記している。 →能4

##### 19 大蔵流『間狂言仕方付』 能楽研究所蔵

狂言大蔵流の型付。題名は帙の題簽による。間狂言の型付は前半のみで、その後数丁分に十二調子に関する説や間狂言の一般的な心得を記し、後半は本狂言の型付となる。間狂言も本狂言も、セリフは記さず舞台上の動きだけを書き留める形式だが、「八島の間那須」「石橋」「望月」では習事たる台詞を書き出し、「那須」と「望月」ではその横に詳しく所作を書き込んでいる。展示は「那須」で、与一が義経の前を退き騎馬で海へ入って八幡に祈る場面。

#### V 囃子付

##### 20 天文十七年千野彦五郎親久奥書『双笛抄』 法政大学鴻山文庫蔵

毛利公爵家旧蔵。永正～天文頃に活動した笛彦兵衛の教えを伝える笛伝書。全長約7m。笛彦兵衛から千野親久へ相伝された伝書を親久が書写して天文十七年に牛尾小五郎（玄笛）に与えたもの。奥書は少々変わった形で、伝書記事の末尾に「笛彦兵衛尉／榮次在判」と署名の写し、一行分の空白の後「右此一卷笛彦兵衛尉方／より被書渡候 餘ニ御懇望候条／乍斟酌書写進候畢 努々／不可有他見者也」の識語、さらに二行分ほど空けて「天文拾七年十月廿四日 千野彦五郎 親久（花押）」の年記と署名が続く。

さらに巻末に貼り継がれた別紙には、持ち主の牛尾玄笛が慶長二年に本書を宍戸善兵衛に譲る旨が記されている。

笛に関する各種の心得を記した伝書だが、展示箇所は〈高砂〉を例として脇能の吹き様を具体的に記した部分で、後に「頭付」と呼ばれる付と同じ体裁になっている。→能3

## 21 慶長二年（1597）樋口石見守知秀自署『鼓之書』下巻 法政大学鴻山文庫蔵

上下二巻の伝書。上巻約 42m、下巻約 37mの長大な卷子本。大鼓役者である樋口石見守（久左衛門）の奥書「此上下巻観世与左衛門国廣ヨリ相伝之／秘密之書也 然者貴殿数年御／執心以不浅故不残写シ進之畢／努々不可有他見者也／ 慶長貳年六月廿一日 樋口石見守知秀（花押）／大国但馬守殿参」があるものの、内容は大鼓に限定できず、能楽全般に関わる多様な記事が集められている。展示は下巻の後半、〈安宅〉「勸進帳」と〈正尊〉「起請文」の詳細な粒付。

## 22 『謡の内笛吹き所ノ事』 法政大学鴻山文庫蔵

森田流笛のアシライ付。能一曲の流れにそって、登場・退場の囃子や舞事、「謡の内」の「笛吹き所」などを順に記していく資料を「頭付」<sup>かしらづけ</sup>「会釈付」<sup>あしらいづけ</sup>などと呼ぶが、本書の段階ではまだその呼称は熟していないらしく、仮綴の共表紙にそのまま「謡の内笛吹き所ノ事」と打付書きされている。〈高砂〉の舞を「さうのかゝり／はや舞打上」としていることなども含め、古態を残している付と思われる。展示は〈羽衣〉と〈山姥〉の箇所。一つ書き最後に「舞ノ手、呂におとす手は吹ぬ物也。竹ゆうも／如此ノ沙汰也」とある「竹ゆう」は『四座役者目録』で「千野ガ弟子」と言われる貞光竹友か。

## 23 『金春太鼓頭付』 法政大学鴻山文庫蔵

伊達家伝来の金春流太鼓の付。全5冊。同じく伊達家伝来の能楽伝書『真徳鏡』（展示番号13）や金春流の太鼓伝書二点とともに、江島伊兵衛氏特注の桐箱に収められている。奥書「右太鼓頭附習之秘事彦九郎権頭／金春太鼓之流儀ヲ定此書ニ印所未／代之可為明鏡也当家相統一子之外／不可有他見者也／天和二年癸戌五月日 金春惣右衛門国重 判」によれば、本書の原本は、金春惣右衛門流の実質三代目にあたる金春国重（1623-83）が天和二年（1682）に編んだもの。本書の筆跡は、仙台藩五代藩主伊達吉村（1680-1752）の右筆ものと判断できる。能を深く愛好した吉村の時代に仙台藩が太鼓伝書や付をまとめて借り上げ、右筆に書写させたらしい。

展示は第2冊末尾の〈猩々〉。古い太鼓付は、左バチを肩にかついで「頭」を打つ箇所に●印を付すだけの簡略なものが多い。本書も同様だが、ここでは珍しく特別の手を書き込んでいる。

## 24 『催花柳』 法政大学鴻山文庫蔵

葛野流大鼓の習事を集めた付。打ち方や間の取り方を具体的に記す粒付。後半には小鼓（観世新九郎流か）の習事の付を収める。大小鼓ともに、最奥の習事の粒を詳しく記すのが特徴。大鼓付の後に記された「催花柳来歴」によれば、葛野好雪の弟子だった田中吉兵衛の所持本を片山豊慶（1711-95）が写し、それを安親なる人物が書写した本の転写本らしい。展示は〈江口〉の数ある秘事の打ち方を記した部分。

## VI 作り物付・装束付

### 25 『作物道具類寸法書』 般若窟文庫蔵

奥書は無いが、江戸初期に記されたと思われる金春流の作り物付。虫損・鼠損が激しい。素朴な筆致で平面図の作り物を描き、その周囲に素材・寸法・作り方等を記す。展示は〈道成寺〉の鐘の作り物図。「高サ四尺六寸五ぶ」、「三尺七寸五ぶヨホウ」（鐘の直径）等と見える。

なお、本書と対の資料が、国立能楽堂企画展「能の作り物」において展示されている。 →金

### 26 『宝生流造物』 能楽研究所蔵

宝生流の作り物付。94 曲の作り物のほか天子輿・囚人輿の図を収める。彩色がほどこされた立体的な作り物図が描かれている。大半の図には寸法や素材が明記されていることから、実用的な付と言える。展示は〈小督〉の柴垣折戸、〈木賊〉の挟草、〈土蜘蛛〉の塚。

### 27 『喜多流後見心得』 法政大学鴻山文庫蔵

喜多流の後見の心得と仕事をまとめた書付。冒頭には、後見を勤めるにあたっての基本的な心得が二十五条まとめられ、その後には計 188 曲分の作り物の運搬・置き所、持ち道具の出し入れ等の舞台上で行うべき仕事の流れを個別に記す。展示は〈景清〉と〈葵上〉。

### 28 寛政十一年戸田丹波守光行奥書『能面并装束附』 法政大学鴻山文庫蔵

面・装束付。奥書「寛政十一年／己未臘月寫／松里（朱角印 2 個）」。「松里は信濃松本藩第六代藩主戸田光行の号。寛政年間の観世流の演目から習物を除いた 158 曲のシテ・ツレ・子方の面装束について記す。ただし本書には〈卒都婆小町〉が加わるのが特色。

### 29 能面切型図・見取図 法政大学鴻山文庫蔵

面の型紙・雛形図。能面の写しを制作する際に用いる。筆者は幕末の加賀藩お抱えの面打師、矢野重光。切型図は、面を正面・側面からかたどったもので、髭穴や毛描きの位置や寸法も記す（朝倉尉・増・若男）。見取図は、面的一部分や面裏、外枠などを描いたもの（朝倉尉・増・神楽面）。

## VII 記述の工夫さまざま

### 30 『弟子衆へおしへ申候ひかえ』 般若窟文庫蔵

奥書はないが、金春重榮の筆（宮本圭造氏「戦国期能伝書の伝来をめぐる一考察」『能楽研究』35号）。貞享～元禄年間に重榮の弟子であった大名ならびにその家中の十七名が見える名簿。入門年月日や稽古曲目を記し、曲によっては型付を控える場合もある。展示箇所は、元禄十一年（1698）に筑後柳川藩主・立花鑑虎（<sup>あきとら</sup>1646－1702）へ教えた仕舞の目録。鑑虎は英山と号した。注目されるのは貼紙の部分で、九月廿三日分として〈野々宮・楊貴妃・井筒・源氏供養・葛城・西行桜〉の五曲を列記する下部の「○打切ノ内ニて正面向」、「△脇へあいしらい」、「□ひらき」、「—●—わき正面見ル」、「●正面へ直し」という記述である。頻出する型を記号によって表している。立花鑑虎への稽古の際に、こうした記号を用いた型付を使用していたらしいことが窺われ、素人への伝授に際する工夫の一例として興味深い。 →金

### 31 宝暦四年（1754）金春元隣筆『仕舞付』 般若窟文庫蔵

能一曲の型付ではなく、仕舞（クセやキリなどシテの所作の見せ所を部分的に舞う）の型付。所収曲は「源氏供養・百万・柏崎・女郎花・忠度・実盛・同切・花月切・笠之段・烏頭・富士太鼓・玉之段・国栖切」。謡を一切引用せず型のみを列記する点が本型付の特徴。

末尾に「金春金四郎」とあり、その後、「宝暦四年／文月十四日／書之／元隣（花押）」の奥書がある。金春金四郎とは、八左衛門家六代元隣<sup>もとちか</sup>の若名。型付本文と「金春金四郎」の署名は楷書だが、宝暦四年奥書は草書で書かれ印象が異なる。金四郎時代にしたためた型付に、宝暦四年に奥書を添えたものか。

型のみを列記するという方法で型付を記述するためには、連続する動きのどこまでを一つの所作と捉え、その所作をどう呼ぶかが定まっていなければならない。この頃には型付を記述する用語（所作単位）の多くが、定着している様子が見られる。→金

### 32 黒川真頼・真道旧蔵『喜多流仕舞附』 能楽研究所蔵

能の型付。83曲所収する。四ヶ条の前付の後に「古能（花押）」と署名がある。花押が臨書のようにあり、また目移りによる誤記を胡粉で訂正している箇所が見えることから、転写本と思われる。「古能」とは九世七大夫古能（1742－1829）で、寛政頃の内容ということになる。『申楽談儀』（黒川本。展示番号3）の旧蔵者・黒川春村の養子である真頼と、真頼の三男である真道の蔵書印がある。

注目したいのが、型についての凡例を記した前付で、近頃できた異名として「巻さし」「角取ル」が挙げられている。本型付において「巻さし」は「さし」と区別するために使用し、「角取ル」は用いず旧来通り「左へ開」と記すと述べる。喜多流における型付用語の変遷を考える上で、興味深い記述である。

### 33『喜多流秘書』 法政大学鴻山文庫蔵

奥書に「此書十大夫直伝秘密共記他見並／他伝猥ニ不可有之事／閑居堂／交歓」とある。内容は型の解説・種々の習事の秘事・翁の秘事に大別できる。展示は型の解説部分で「立・一ツ拍子・正へ出ル・シカケ・ヒラキ・サシ・角取・左右・打込・アゲ・大左右・マキザシ・クワイ拍子」のそれぞれの動きを分析・解説する。本資料も所作単元の定着・浸透を感じさせる資料と言える。『喜多流仕舞附』（展示番号30）では「角取ル」を用いていなかったが、本資料では「角取」が立項されている。奥書の「十大夫」とは、九世七大夫古能（1742－1829）よりも後の人物と推察され、十世十大夫盈親だろうか。

### 34 宝暦十一年（1761）岩井直恒筆『神楽之秘書』 法政大学鴻山文庫蔵

〈龍田・三輪・巻絹〉の神楽の型と、春日・一噌・森田三流の笛唱歌を併記する。京観世岩井家の当主で観世元章の弟子だった直恒が、師伝を「弓町之師家ニテ拝写」（奥書）したもの。舞台上の動線を示すため舞台略図を二十種以上書き、足遣いや幣の扱いなども詳細に記す。唱歌に注記した数字や記号と舞台図中の数字や記号の示す位置が対応している。

### 35 浅井織之丞章盈筆『習事伝授書留』 法政大学鴻山文庫蔵

観世元章からの伝授事を弟子の浅井織之丞章盈がまとめたもの。明和四年（1767）に元章が幕府へ提出した「伝授目録」の写しの後、小習事目録および、宝暦～明和頃に織之丞が習ったり観たりした習事の演出が書き留められている。後の書き込みや訂正も多い。

展示は〈松風〉「見留」、〈野宮〉「拝み留（合掌留）」、〈熊野〉「膝行」（いずれも小習事）の舞い方を書き留めた箇所。大小鼓や笛の手を知っていることが前提になっている。

36 寛政三年（1791）『平政香笛唱歌』 法政大学鴻山文庫蔵

一噌流の笛唱歌集。二冊組で、展示は特に重い習事の唱歌を集めた冊。〈乱〉の「呂掛り」の唱歌とシテの足取り、見回す位置、身体を沈める位置等を記している。重い習事になれば、相手役の動きや演奏の情報をすることも重要になる。

37 小杉次三郎大鼓伝書『別伝習之巻』 能楽研究所蔵

石井流の大鼓伝書。加賀藩の大鼓役者小杉次三郎の資料のうち。〈朝長〉の重い習事「懺法」の間を、実際には演奏されない笛の唱歌を基準にして示している。朱は太鼓の手。『平政香笛唱歌』（展示番号 36）と同じく、相手役がどこで何を奏するかも重要な情報として書き留められている。

## VIII 版本 素人愛好者へ向けて

38 古活字版『八帖本花伝書』 能楽研究所蔵

桃山時代の能の実態を示す伝書。能の故実・謡・囃子・型と多岐にわたる内容の大部な能伝書であることから、編纂者不明ながら玄人の関与があつて成立した伝書と推察されている。展示は、五巻の舞に関する所説から「序ノ舞」。 →能 3

39 正保四年（1647）版『童舞抄』 能楽研究所蔵

同装丁の『五音抄』『舞台抄』の二冊を加えた五冊で一揃。『舞台抄』に奥書「于時慶長元稔居諸／下間少進法印／仲康書判／朱印」と刊記「正保四<sub>ノ</sub>年姑洗吉日／二條通観音町／中嶋清兵衛開板」とある。『童舞抄』（展示番号 11）の版本で、展示は上巻の〈通盛〉。大正 3 年 11 月の東京音楽学校『能楽図書陳列品目録』により、正保四年本に先行する寛永九年（1632）本の存在が知られる（大正 12 年の震災で焼失した江島伊兵衛氏旧蔵本）。慶長元年（1596）に編纂された能型付『童舞抄』が、寛永九年には刊行され、さらに正保四年に再版されるという、江戸の早い時期における型付の出版事情から、一定数の型付読者おりその需要があつたことが判る。

40 万治元年（1658）刊『七大夫仕舞付』 法政大学鴻山文庫蔵

刊記に「下カヽリ百番者七太夫嫡伝之仕舞付秘密大事悉書加之令板行者也」とあり、また外題にも「仕舞付百番七太夫流」とあることから、通称『七大夫仕舞付』と呼ばれる下掛の謡本である。本展示は付に注目する趣旨であるので、あえて通称を用いた。上部に型付・装束付、本文の左右に間拍子・笛の頭付・大小太鼓の粒付、間狂言のセリフ、舞台図、囃子の心得などを含む画期的な謡本である。型付・装束付・舞台図の大半は、版本『童舞抄』（展示番号 39）から取っている。間狂言の型付は記されていないが、謡本にシテの型付・囃子付を盛り込む、謡本と付とを融合した一書と言える。しかし、江戸時代に再版されることはなかった。

41 貞享四年（1687）刊『舞楽大全』 法政大学鴻山文庫蔵

全 22 冊。百番の能型付、謡・囃子などの習事、笛頭付・太鼓頭付などから大部な書である。型付には装束・曲柄・囃子事・舞事・謡い方・地拍子・間狂言・舞台図・作り物・諸注意などを含み、多岐にわたる内容を網羅した観能手引書的な性格が濃厚である。



#### 42 元禄十年（1697）刊『能仕舞手引』 法政大学鴻山文庫蔵

全7冊の能型付。25曲を所収。一つ書きで、謡の一部を引用してその箇所を記す形式。首巻には図版を集成し、舞台図・装束・面・仮髪・冠物・楽器・小道具等の絵図が収められている。奥書「元禄十丁丑年三月六日／大坂高麗橋老丁目／野村長兵衛／江戸日本橋万町／萬屋清兵衛／近々に右之通百番之都合板行に出し申候」。

#### 43 嘉永（1848－1853）頃『天津賢』 法政大学鴻山文庫蔵

十代富山藩主・前田利保（1800－1859）によって刊行された能の型付。三冊に174番を所収。謡の一部を引用してその箇所を記す形式。冒頭に装束付を置く。詞章は草書体で、型は楷書で刷り、版面に工夫が見られる。また、舞事の型付は『宝生流／舞形付 笛森田流』として別冊で編まれており、序舞・中ノ舞・男舞・早舞・破ノ舞・彩色・翔・働・祈・鞆鼓・楽・神楽が収められている。唱歌に型を傍記。その他、慶応二年（1866）刊クセ舞付（一枚）がある。

### IX 近代以降の型付・囃子付

#### 44 『図解説明観世流仕舞独り稽古』 法政大学鴻山文庫蔵

仕舞の型付。明治45年刊。佐藤鐘太郎著。松崎幸太郎発行兼印刷。明誠館書房。所収曲〈老松・狸々・熊野・船弁慶・東北・羽衣・田村〉。謡に朱筆で型を傍記する形式。舞台上の動線を図示する、型の名称とその具体的な動き方を解説する項目がある、代表的な型の絵があることが特色。

#### 45 『観世流仕舞図解集』 法政大学鴻山文庫蔵

仕舞の型付。6冊。明治45年刊、大正14年第12版。池田晴三著作兼発行。松丸銀次郎印刷。謡曲珍書会印刷部。156曲のクセ・キリ等の仕舞を謡に朱筆で型を傍記、一曲の動線を図示する形式。中ノ舞・序ノ舞・男舞・カケリについても、森田流唱歌に型を傍記、動線図を掲載している。

#### 46 『宝生流仕舞伝書』第一巻 法政大学鴻山文庫蔵

仕舞の型付。昭和18年刊。宝生重英著。江島伊兵衛発行。わんや書店。最終頁「第十七世宗家／宝生重英／（花押）。〈西王母・船弁慶・放下僧・小袖曾我・杜若・東北・大江山・巻絹・女郎花・班女・敦盛・桜川・竹生島〉のクセ・キリなどを所収。型を具体的な動きに分解して詳細に説明を加える点や、足拍子を八ツ割で表示する点などが特色。田中幾之助・佐野巖が原稿作成に携わるも、太平洋戦争のため第一巻にて刊行が中絶した旨を江島氏が帙に記す。本書の広告が雑誌『宝生』昭和18年11月号に掲載。

#### 47 『喜多流独吟兼用仕舞形附』 法政大学鴻山文庫蔵

仕舞の型付。2冊。大正13年刊。喜多六平太著。江島伊兵衛発行。一噌定次郎印刷。わんや書店。153曲所収。謡に朱筆で型を傍記する。上巻は服装・仕舞の作法・カマエ・型などを説明した解説書。型の完成形を写真で掲載する。

#### 48 『金春流仕舞型付』 法政大学鴻山文庫蔵

仕舞の型付。2巻。昭和2年改訂再版発行。金春光太郎著。江島伊兵衛発行。大澤音吉印刷。わんや書店。上巻には共著者に櫻間金太郎と金春栄治郎の名と写真を掲載、大正9年刊行の初版本が東京大震災で消失したために再版した旨を述べる。上巻は、仕舞の服装・作法・カマエ・扇の扱いなど基本的事項の説明、ネジル・引く等の足遣いを足跡で図示、型の説明などの解説書。下巻は100曲所収の仕舞付。

謡に朱筆で型を傍記する。上巻には型の完成形を写真で掲載する。型を写真で掲載するのは大正 9 年刊『宝生流仕舞形付』・『喜多流独吟兼用仕舞形附』（展示番号 47）等もあり、大正期頃には型を伝える記録媒体として写真が注目されたことがうかがえる。

#### 49 『金剛流昭和版仕舞形附』 法政大学鴻山文庫蔵

仕舞の型付。3 冊。昭和 6 年刊、第 3 輯のみ昭和 8 年刊。金剛右京著。檜常太郎発行兼印刷。檜書店。第 1・2 輯に 170 曲所収。謡に朱筆で型を傍記する。第 3 輯は扇の持ち方・カマエ・基本の型の解説書。詳細な図解が特徴、側面からの視点でも扇の動かし方を解説する。右京の仕舞スケッチは松野奏風の作。

#### 50 『宝生流仕舞基本 左右篇』 法政大学鴻山文庫蔵

左右の型の解説書。付録に実物の踏型図。昭和 17 年刊。宝生重英著。江島伊兵衛発行。わんや書店。「左右込ミ上げ扇」「大左右正へ左打込ミヒラキ」「左右打込ミ下ニ居扇タタミ」の左右の型を含む一連の動きを解説。左右の型に特化した点、連続写真や図を駆使している点が興味深い。

#### 51 『囃子大成』 法政大学鴻山文庫蔵

小鼓・大鼓・太鼓の付。春～冬・別巻、計 5 冊。春・夏は大正 14 年（再版）、冬は大正 14 年、秋・別巻は大正 15 年刊。田崎延次郎著、檜常太郎発行兼印刷。檜大瓜堂書店。青木常次郎印刷。春～冬には、謡の右側に高安流大鼓と大蔵流小鼓、左側に葛野流大鼓と幸流小鼓・観世流太鼓の付を記す。別巻は太鼓が金春流の場合の付。四拍子すべてを一冊にまとめる点が特色である。

#### 52 『観世流太鼓手付諸流異同辨 全』 法政大学鴻山文庫蔵

太鼓方観世流の手付。観世元規著。大正 13 年の第五版（初版は明治 43 年）。通常の頭付（謡の横に手組名を記す）の後に付録として、曲ごとの「手」や「地」（特別な打ち方の部分）の粒付や、舞事の手配り等が記されている。展示は協能各曲の「地」の粒付。

#### 53 初版本『一噌流笛指付集』 法政大学鴻山文庫蔵

舞の唱歌や謡のどこにアシライを吹くかといった情報ではなく、笛のどの穴をふさぎ度の穴を開放して音を出すか、という指付。昭和 15 年に一噌流笛を長年稽古していた素人森川荘吉が編み、知人に配布した非売品。一噌鉄二の讚序あり。現在は同じ内容のものが、わんや書店より刊行・販売されている。

#### 54 『金春流太鼓全書』 能楽研究所蔵

太鼓方金春流の手付。二十二世金春惣一（惣右衛門）著。昭和 28 年刊。実際的な手組や粒付だけでなく、流儀の主張、道具の扱い、理論などすべてを収める。横道萬里雄との協同で、従来の囃子付には無い理論的な説明や分類を試みている。展示は太鼓手組の連結の仕方について説いた部分。

#### \* 九条忠孝本転写『観世流作物之図』 法政大学鴻山文庫蔵

大和綴の中本。料紙は影写用と思われる薄手の楮紙。彩色の作物図と小道具図を収めるが、ともに詳しい寸法が入っている。奥書によれば、原本は、観世大夫元章や片山家を後援した九条家の松殿忠孝（明和二年に 21 歳で没）が書き、彼の早世後、同家家司の塩小路光貫が所持した本。その後、寛政九年まで三度転写されている。〈大蛇・竹雪〉など観世流にない曲も含むが、〈大瓶猩々〉は観世流のみの所演曲である。 →能 4